



大震災の教訓もとに

更別農高 防災講話

【帯広発】更別農業高校（伊與部明校長）は10日、同校で防災講話を実施した。東日本大震災を経験した2人の講師が、震災当日とその後には起きた出来事や気持ちの変化を説き、未来に向けて歩む自身やまちの様子を伝えた。

講話は、同校創立70周年を記念して行われた。演題は「3・11を学びに変えるあの日」の石巻市大川小学校の校庭から学ぶもの。

東日本大震災直後の津波にのまれ、大川小学校では児童7人、教職員10人が亡くなった。講師を務める佐藤徹郎さんの次女もその一人。同じく講師の只野哲也さんは、大川小で津波の被害に遭いながらも生還した児童4人のうちの1人だ。

この日、佐藤さんは「大震災は日常を奪う」と述べた。当時中学校教員だった佐藤さんは、停電で校内放送が使えなかったり、グラ



東日本大震災当時を振り返る講師の2人

スの落下によって避難経路が通れなかったりなど、避難訓練と異なる事態が多く「種中に想定できることができていなかった」と、当時の後悔を伝えた。震災直後、大川小周辺に次女の身元を確認しに行った際、多くのランドセルと子どもの遺体が並ぶ光景を「今でも忘れることができない」と話した。

只野さんは、校舎での思い出の数々を色紙やかな写真と共に振り返り、震災直後の校舎の写真と照らし合わせ、被害の大きさを伝え

た。「震災後の子どもたちは、環境の変化や大人への

にいそしんだ当時を振り返った。

校舎解体の話を持ち上がった際、卒業生らと共に「遊ぶ・食べる・学ぶ」の3点を大切に、心のケア

「チーム大川」を結成。校舎保存を各地で訴え続けたことにより、地域の理解を得て、震災遺構として昨年

から一般公開しているという。

只野さんは現在、大川小卒業生らによる「Team大川」

代表を務め、校舎周辺の現地ガイドや研修・講演などに取り組んでいる。避難

誘導ガイドラインの作成にも着手しており「生きていく私たちの果たす役割であり、大川小を伝え残す責任」と語った。